



農業保險論後編

完

1006
9



114
A 3623
4

農業保險論後編

瑪悦德 著

齊藤鐵太郎

渡邊醇之助 譯

犬塚浩道

莊原 和 校



第一篇 過當ノ抵當トナリタル土地ヲ公賣
處分ニ付スル事并ニ北海道殖民策

第一條

曩ニ余ヲ建言シタル農業保險論中土地抵當負債
外償還法ハ農民々高利ノ為メ増加シタル多額ノ
負債及地價半額以内ノ抵當負債額ハ第一抵當證

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

券ヲ以テ半額以上三分ノ二以下ノ負債額ハ第二
抵當證券ヲ以テ又三分ノ二以上五分ノ四以下ノ負
債額ハ第三抵當證券ヲ以テ償却シ負債者ノ大半
ヲシテ其苦境ヨリ脱離セシムルヲ得ヘキナリ而
シテ高利ノ為メ増加シタル負債ハ勸解廳ニ於テ
之ヲ低減セシムヘシト雖氏尚ホ其負債タル第三
抵當證券ノ貸付制限額(八割)ヲ超過シ地主ヲシテ
自營ノ道ヲ立ツル能ハサルニ至ラシムルモノア
ルヘシ是ノ如キ負債ハ農民ヲシテ長ク高利債主
ノ境遇ニ窘マシメシヨリハ寧口公賣處分ニ付ス
ルノ勝レルニ若カサルモノ、如シ然リト雖氏其
農民ニ在テハ公賣處分ヲ受クルトキハ一朝ニシ

テ所有ノ土地ヲ失ヒ自ラ之ヲ耕スコト能ハスシ
テ忽チ目下ノ活路ニ窮スヘキヲ以テ寧口甘シテ
從來ノ地位ニ居ランコトヲ欲スルナラン是故ニ
土地ヲ公賣處分ニ付スルニハ農民ヲシテ將來自
營ノ道ヲ得セシムルヲ以テ最モ必要ノ事トナス
ナリ

第二條

夫レ北海道ハ天府ノ土ナリ其地ヲ拓キ其産ヲ興
シ且ツ隣邦呑噬ノ心ヲ杜絶スルニハ須ラク殖民
勸導ヲ事トナシ殊ニ農民ノ移住ヲ要スヘシ蓋シ
此處ニ見往ルモノハ以テ其速ニ人口ヲ繁殖
養育シテ半額得ルニ至ル相當ノ保護ヲ與ふルニ務メ

此等移民ノ意ヲ興起セシメ、
移民ノ事ニ於テ適當ノ組織ヲ
設ケ以テ其計ヲナサ、
八十三年六月山縣大臣ニ對シ土地抵當貸付會社
ノ事ヲ陳述セシトキ北海道殖民ニ係ル方案ヲ建
議シタリキ當時余カ建議セル方案ハ獨逸國ニ於
テ人口一萬人ニ付年々百人ノ壯丁ヲ徵募シテ兵
役ニ充ツルカ如ク日本ニ於テモ亦人口一萬人ニ
付毎歳青年ノ農民五人ヲ徵募シテ北海道ニ移住
セシムルニ在リシナリ蓋シ農民ノ耒耜ヲ以テス
ルト兵士ノ劔戟ヲ以テスルト護國ノ事ニ至リテ
ハ其理異ナル所ナケレハナリ其他又此移住民ヲ

シテ村邑郡縣ノ組合ヲ編制シテ連帶責任ヲ有セ
シムルノ方案ト并ニ此移住民ヲシテ最初ハ小作
人タラシメ正當ノ順序ニ由リテ漸次ニ土地所有
主トナラシムルノ方案トヲ立テタリ今該方案ノ
要領ヲ左ニ摘載セン曰ク此殖民組合ハ土地抵當
貸付會社ト密接ノ關係ヲ有セシメサルヘカラス
土地抵當貸付會社トハ他ノ同會社ト區別シテ其
特性ヲ指示センカ為メ當時殖民銀行ト名ケシモ
是レナリ而シテ殖民銀行ハ直接又ハ殖民廳
媒介ヲ以テ移住民ニ資金ヲ貸付シ若クハ物品(乘
船切手、土地、工具、農具、木材、家畜、果樹、種穀、種子)ヲ交
附此資本ヲ以テ開墾シタル土地ニ付期限ヲ定

街并賦金ヲ取立テ權利ノ權ヲ有セシム年賦金ハ銀
衝賦附金ニ對シテ利子及元金ノ償却ニ充ツヘキ
金額ニ定メ貸付金ニハ銀行ヨリ直接ニ各個人ニ
貸付セルモノハ勿論共同事業(道路橋梁舟車學校
病院等)ノ保助金トシテ組合ニ貸付セルモノニ對
スル組合各員ノ分頭負擔額モ亦之ヲ算入セサル
ヘカラス又殖民銀行ヲシテ右支出ノ需ニ供セシ
カ為メ殖民公債證書ヲ發行シテ資金ヲ募集セシ
ムヘシ此殖民公債證書ハ抵當證券年賦償還債券
興農資金年賦償還債券ト稱ス其性質ヲ同クスルモ
ノニシテ之ヲ無記名トナシ一定ノ利率ヲ設ケ且
ツ其償還金ノ割合モ各移住民ヨリ返還スル所ト

同一ニスヘシ果シテ此方法ヲ以テ資金ヲ貸付セ
ハ則青年ノ農民必自奮趨向シテ移住ノ途ニ就キ
政府ハ農民徵募ノ權ヲ有スト雖モ復タ之ヲ實行
スルノ要ナキニ至ルヘシト是レ余カ當時已ニ吐
露セシ所ノ意見ナリ

余カ今茲ニ殖民銀行ニ係ル先年ノ建議ヲ再述ス
ル所以ノモノハ他ナシ農民ノ現今已ニ破産ヲサ
セシモノ其數甚ク多ク且ツ將來ニ於テモ亦過當
ノ抵當トナリタル土地ヲ公賣處分ニ付スルコト
亦極メ多クハキヲ以テ其農民ヲシテ自營ノ
道ヲ得金ニ使フコト欲スルカ為メテ
其薄産餘金ニ使フコト欲スルカ為メテ

夫其政府ハ此貴重ノ人民ヲ放棄シテ窮困饑渴ニ
陥ラシメテハキ者非ス又或ハ之ヲ布哇國ニ移住
セシメテ以テ他國ノ利益トナスカ如キコトアル
ヘキ者ニ非サルナリ

夫ノ布哇國移住ノ如キハ余敢テ之ヲ禁止スル
意ニアラスト雖日本ハ已ニ北海道ノ如キ良殖
民地アリ若シ速ニ純良ノ人民ヲ移住セシメテ其
國ノ富强ヲ計ルニアラサレハ後來或ハ之ヲ失フ
アルモ亦未タ測ルヘカラス故ニ政府ハ速ニ寛優
ナル規則ヲ設ケ以テ彼ノ苛刻ナル高利債主ノ為
メニ破産シタル農民ニ與フルニ移住ノ便利ト適
當ノ貸付金トヲ以テシ其ヲシテ他ノ事業ニ就カ

ンヨリハ寧口自奮シテ北海道ニ移住セシムコトヲ
熱望スルニ至ラシメサルヘカラスナリ

余カ曩ニ建議セル府縣貯金兼土地抵當貸付會社
ハ北海道ニ於テハ殖民銀行ノ業務ヲ兼ネシムヘ
シ思フニ北海道ニ殖民銀行ヲ設立シ以テ破産農
民ノ移住ヲ促スノ効力如何ヲ實驗スルコト一
年ナラシメハ必ス當局者ヲシテ北海全道ノ殖民
策ヲ計畫スルノ志氣ヲ奮起セシムルニ至ルヘキ
ナリ

第四條

北海道ニ於テ許多ノ土地ヲ有スル地主ハ該道
殖民及爲メ如實ニ其富源ヲ得ヘキヲ請ニ試ニ之

論其全具讓道ハ其地ハ概テ皆價直無有也
其地ハ其土地ノ十分一ヲ殖民銀行
貸付テ小作人ニ貸與セシメ而シテ小作人ヲシ
テ元利成崩ノ法ヲ以テ銀行貸付金ヲ償還セシム
ルノ外別ニ小作料ヲ徵收スルコトナク如之其地
地ハ漸次小作人ノ所有ニ歸セシムルモ地主ハ猶
應ニ非常ノ利益ヲ得ヘキナリ何トナレハ餘ノ十
分九ノ土地ハ從來曠漠タル荒野ニシテ殆ト價直
ヲ有セサリシモ今ヤ近傍ニ村落ヲ成スニ至リ其
價直為メニ一時ニ騰貴スヘシ是豈ニ非常ノ利益
ニ非サルヲ得ンヤ果シテ是ノ如キニ至ラハ北海
道ハ實ニ官有地、御料地、華族所有地タルニ適スヘ

シ就中華族所有地ト為スカ如キハ日本ヲシテ其
華族ニ政事上學國及ヒ英國ト同一ナル地位ヲ保
タシメンコトヲ欲セシメハ固ヨリ之ヲ以テ必要ト
ナスヘキナリ
余ハ上文論スル所ノ旨趣ヲ明瞭ナラシメシカ為
メ更ニ之ヲ再説セシム余カ説ノ旨趣トスル所ハ地
主ヲシテ自ラ小作人移住地ヲ設ケ小作料ヲ重シ
シ以テ私利ヲ營マシムルニ在ラスシテ專ラ小作
人移住地ノ近傍ニ於ケル土地價額ノ騰貴ヲ待テ
之ヲ由リテ其利ヲ得セシメントスルニ在リ乃チ
貸付金ハ專ラ殖民銀行ヲシテ之ヲ貸出サシメ小
作料ハ亦殖民銀行ノ收入トナシ而シテ地主即全

主其買收地、移民公債證書ノ數、應ラ自
世所有ノ土地、小作人ヲ移住セシメ、且ツ其土地
後、小作人ノ所有ニ歸セシムルニ在リ例セハ
一金主アリ貳萬圓ノ資金ヲ北海道ニ投シ其内貳
千圓ハ土地ヲ購求シ壹萬八千圓ハ殖民公債證書
ヲ買收シ而シテ其土地ノ十分一ヲ殖民銀行ニ寄
附スルトキハ銀行ハ壹萬八千圓ノ五倍即チ九萬
圓ヲ其土地ノ殖民組合ニ貸付スルコトヲ約スト
センニ若シ農家一戸ニ付三百圓ヲ要スルトセハ
合計三百戸村數六箇村(一村五十戸ト見積リ)ヲ創
建スルヲ得ヘシ蓋シ金主ハ小作料ヲ得スト雖モ
壹萬八千圓ノ殖民公債證書ニ對スル利子ヲ收メ

其他該村落ノ近傍ニ於ケル所有地(即チ十分ノ九)
ノ價額騰貴スルカ為メ之ヲ賣却シ或ハ抵當トナ
シ又ハ自己ノ所有地ニ人民ヲ増スカ為メニ經濟
上ノ便宜ヲ得ル等ニ因リ諸般ノ利益ヲ收ムルコ
トヲ得ヘシ而シテ其費消スル所ヲ問ヘハ則僅ニ
土地購求金額ノ十分一即チ貳百圓ニ過キサルニ
シ而シテ殖民銀行ノ移住民ニ貸付スヘキ金額九
萬圓ノ五分一即チ壹萬八千圓ハ之ヲ金主即地主
ヨリ募集シ其五分四即チ七萬貳千圓ハ殖民公債證
書ヲ發行シ以テ一般人民ヨリ募集スルヲ得ヘシ
是ヲ甲之ヲ觀ルニ金主ノ其資金ヲ北海道ニ投
入シ其費ヲ獨ニ此ノ事業ヲ營ルニ充テル

其利益人多キコト日ヲ同クシテ論スヘカヲサル
地況シヤ之ヲ北海道ニ投スルトキハ管理ノ勞
ハ銀行專ラ之ニ任シ危險ハ移住ノ人民獨リ之ニ
任スルニ於テヤ

第五條

若シ夫レ日本内地ニ於テ前篇ニ詳論セル方法ヲ
以テ收獲保險家畜保險及ヒ家屋保險ヲ創設シ次
テ之ヲ北海道ニ及ホストキハ移住ノ人民ハ倍々安
全ノ地位ヲ得殖民公債證書ハ忽チ信用ヲ増加ス
ヘシ所謂信用ヲ増加スルトハ殖民銀行ニ於テ利
率ヲ低減スルモ尚ホ其金額ヲ募集シ得ルヲ謂フ
ナリ而シテ此利率ヲ低減スルトキハ移住民ノ償

還スヘキ年賦金ノ割合モ亦隨テ減少スルニ至ル
ヘシ故ニ保險法ヲ創設スルトキハ其北海道ノ開
墾ニ裨益スル所モ亦將ニ僅少ナラサレントス

其利益人多キコト日ヲ同クシテ論スヘカヲサル
地況シヤ之ヲ北海道ニ投スルトキハ管理ノ勞
ハ銀行專ラ之ニ任シ危險ハ移住ノ人民獨リ之ニ
任スルニ於テヤ

雜誌第三十二號乃至第四十八號ニ掲載セルモ
ナリ

蓋日本ノ小作條約ハ種々ニシテ一ナラス獨リ各
地方其趣ヲ異ニスルノミナラスシテ各村又之ヲ
異ニセリ然レトモ左ノ事項ニ至リテハ一般ニ其
趣ヲ同クスルモノ、如シ

第一 小作條約ハ其期限ノ永キモノ甚稀ナリ
大抵永期ノ條約ハ其地開墾ノ時又ハ小作人
其地主ニ貸金アル時ニ於テ之ヲ契約スル者
ニ限リ其他ハ十年ノ期限ト雖モ極メテ少ク
二十年ノ如キハ僅ニ一二地方ニ止リ甚シキ
ニ至テハ五年乃至三年、又ハ之ヨリ短キモノ

アリ其期限ヲ定メサル者モ亦少シトセス

第二 凶作又ハ天災ニ罹リタル小作料ヲ輕
減スルノ舊慣ハ各地皆之アリト雖モ小作條
約中ニ其旨ヲ明記セルモノハ極テ稀ナリ故
ニ縱ヒ其小作料ハ豐年ノ收穫高ヲ以テ之カ
標準トナセシニモ拘ハラス凶年又ハ天災ニ
方リテ之ヲ輕減スルハ一ニ地主ノ好意ニ因
レリ又之ニ反シテ凶年ノ收穫高ヲ標準トナ
シタルモノ即チ小作料額ノ少ナキモノハ概
シテ其條約書中ニ凶年ニ際スルモ料額ヲ輕減
セザル旨ヲ明記セリ(凶年ノ收穫高ヲ標準ト

輕減セザル旨ヲ明記セリ(凶年ノ收穫高ヲ標準ト

第三編 小作料ノ納付ヲ怠ルキハ地主ハ直ニ其
小作人ヲ廢シテ耕地ヲ取戻スノ權ヲ有シ植
付作物ハ大抵地主ノ所有ニ歸ス但シ一二ノ
地方ニ在テハ此場合ニ於テ肥料ノ為メ費セ
シ料金を小作人ニ支拂フノ慣例アリ又小作
料ノ納付ヲ怠ラサルモ地主ニ於テ自ラ其土
地ヲ要スルキハ隨意ニ之ヲ取戻スノ權ヲ有
シ習慣ニ於テモ亦別ニ之ヲ禁スルモノアル
ヲ見ス然レトモ其權利ヲ實行スル者多カラ
ズ是レ一ハ習慣ニ牽制セラレ一ハ其土地ヲ
取戻スモ地主ノ便利トナルコト少ナキヲ以
テナリ

第四 耕地改良ノ費用ハ地主ヨリ小作人ニ辨
償スルヲナシ故ニ小作人ハ其耕地ヲ改良セ
サルコト多シ

第五 今日ノ小作料ハ殆ント最高額ニ上リ耕
作ニ容易ナル沃土ノ小作料ハ勿論耕作ニ困
難ナル瘠土ト雖モ復タ昇ス可ラサルノ極ニ
達セリ而シテ沃土ノ小作人ハ瘠土ノ小作人
ニ比スレハ高額ノ利潤ヲ得ルコトナキニア
ラスト雖モ地主ニ於テ隨意ニ其料額ヲ高低
スルノ權アルヲ以テ其利潤タル一時ニ止マ
リテ永年ニ保有スルヲ得ス故ニ毫モ小作人

欲セリ其地ハ到底小作人トナリ非常ノ勉勞ヲ以テ
テ竟テ其地ノ所有主トナルノ外復他ニ良策アル
コトナシ

第七條

明治年代ニ於ケル小作人ノ狀況ハ一般ニ困難ヲ
極ムルモノ、如シ是レ各種ノ報告ニ依ルノ外小
作人輩ノ類ニ不平ヲ鳴ラシ徒黨ヲ結ビテ小作料
ノ輕減ヲ地主ニ迫ルノ事實ヲ以テ之ヲ證明スル
ニ足レリ而シテ其公安ヲ妨害スルカ如キハ最モ
經濟上ノ大害ト謂ハサルヲ得ス蓋シ小作人ニ於
テ其農業ヲ營ムニ充分ナル土地ヲ所有シテ獨立
自由ノ農民タラシムルヲ熱望スト雖其目的ノ遂ケ

難キコト嘗テ今日ノ如キアラス是レ一般人民ノ
損害即チ日本帝國ノ損害ヲ惹起セル所以ナリ
明治六年七月地租ニ關スル數多ノ法律ヲ發布セ
ラレタリ其地方官心得書第十五章ニ曰ハク土地
ヲ人ニ預ケ小作セシムルハ自ラ耕作スルト其土
地改良ニ盡スノ勞費殊異アルヲ以テ隨テ收益モ
亦多寡無カル可カラス故ニ小作地ヲ以テ自作地
ニ比スレハ其利自ラ少キノ理アリ譬ハハ收益ノ
利分自作地六分ノ利ナレハ小作地ハ四分ニテ相
當ナルヘシ檢査ノ際最モ注意スヘシト此ニ據レ
テ自作地ノ收益ハ自作地ノ收益ニ比スレハ三分
ノ一ヲ減スル者ナリ之ヲ日本經濟上ノ損害

ト謂ハク今ヤ兵士ヲ倍シ軍艦ヲ増シ
テ國々國權ヲ維持シ儼然邦域ヲ守リテ隣國虎狼
ノ欲ヲ制セントスルノ秋ニ方リ此經濟上ノ損害
アリ其影響スル所豈僅クナラシヤ

第八條

余千八百八十三年ニ於テ日本土地抵當貸付會社
論ヲ草セリ其第二十章ニ論シテ曰ク
此等ノ場合ニ於テモ永期貸付會社ノ功益ハ甚
ク大ナルヲ觀ルニ足レリ該會社ニシテ設立ス
ルニ至レハ小作人ハ其小作地ヲ買取ルノ便ヲ
得ヘク地主ハ又之ヲ賣却シタル資金ヲ以テ重
子テ地所ヲ買收シテ小作人ニ貸シ或ハ新地ヲ

開墾シテ從來無價ノ地面ニ高價ヲ生セシメ利
源ヲ興開スルヲ得ルナリ且ツ從來ノ小作人ニ
シテ新クニ地主トナリシ者ハ其地ヲ改良シテ
得ル所ノ利益ハ即チ自己ノ收益トナルカ故ニ
必ス耕作ニ注意シ資本ヲ費シ勞力ヲ増シ以テ
其改良ヲ謀ルニ汲々タルニ至ルヘシ然ラハ則
其地價必ス騰貴セサルヘカラス(第五章ノ計算
ニヨレハ從來ノ價格ノ五割ヲ増スヘシ)其收額
モ亦必ス増加セサルヘカラス而シテ此ノ收獲
ノ増加ヲ以テ其借財(即チ前地主ニ拂ヒタル金
員)ノ利足ヲ拂ヒ尚年々其元金ヲ償却スルニ餘

第九條

余等以テ之ヲ觀ルニ小作人ノ現状ハ農業保險法ト農民ニ適當ナル貯金法トノ開設ヲ以テ大ニ之ヲ改良スルヲ得ヘシ蓋シ收穫保險、家畜保險、及ヒ家屋保險ヲ實施スレハ小作人ニ於テ縱ヒ災害ニ遭逢スルコトアルモ小作料ノ輕減ヲ地主ニ歎願スルノ要ナカルヘシ又貯金法ヲ設ケ細民ヲシテ節儉ノ餘金ヲ預クルニ便利ナラシムルキハ隨テ小作人ノ地位ヲ鞏固ニシ獨立自營ノ道ヲ立テシムルヲ得ヘシ此他若シ北海道ニ府縣貯金兼土地抵當貸付會社ヲ設立シテ殖民銀行ノ事務ヲ兼ネシムル而シテ前篇ニ論述シタル如ク北海道ノ移住民

ヲシテ小作人ヨリ漸次ニ土地所有主タラシムルノ方法ヲ以テ該道ノ移住ヲ獎勵セハ内地ノ小作人ニモ亦大ニ幸福ヲ與フヘキナリ其故何ゾヤ抑モ現今小作人ニ於テ其家族ヲ給養スルノ資トナスモノハ唯自己ノ勞力ト農業上ノ智能ヲ有スルトニ是レ由ルノミ固ヨリ自耕スヘキ土地ヲ有スルニ非ス又自己ノ資金ト低利ノ貸付金トニ乏シキヲ以テ已ニ開墾シタル土地ノ小作人トナルヲ得サルナリ故ニ今若シ殖民銀行ニ於テ北海道ノ移住ヲ獎勵セハ小作人ノ輩ハ内地ヲ去リテ該道ニ移住シ竟ニ土地ノ所有主タルコトヲ得ヘシ又現今各業作農ノ間ニ在リテハ小作地ヲ得ンカ為メ

互に競争ヲナシ其利ハ獨リ地主ニ歸シ倍小作料ノ増昇スルヲ致セリ今若シ殖民銀行ヲ設立スルニ至ラハ地主ハ小作人ヲシテ其所有地ニ安處セシメンカ為メ務メテ寛裕ノ約束ヲ為サ、ルヲ得サルニ至リ條約期限ヲ長クシ小作料ヲ低減シ且ツ勸解ニ由リ凶年ニ當リテ小作料ヲ輕減スル事及、土地改良ノ費用ヲ小作人ニ返却スル事等ハ皆條約書面ニ掲ケ地主ノ隨意ニ小作地ヲ取戻スカ如キハ復タ行フヘカヲサルニ至ルヘシ果シテ然ラハ地主ハ小作人ニ對シテ妄ニ專横ノ措置ヲ為スコトヲ得ス縱ヒ之ヲ為スモ小作人ハ輒テ之ヲ免ル、コトヲ得ヘシ然リ而シテ内地ノ地主ニ

在リテモ亦決シテ小作人ニ不足ヲ生セスシテ從來小作地トナセシ土地ヲ荒蕪ニ屬スルノ憂ナカラルヘシ何ソヤ思フニ日本ノ人民ハ一般ニ北海道ノ移住ヲ嫌惡シ就中農民ハ其性頑愚ニシテ舊ヲ愛シ新ヲ避ルノ癖アルヲ以テナリ況ンヤ日本ノ人口年一年ヨリ増加スルニ於テヤ

第十條

上ニ論スル所ノ小作狀況ノ改良ハ決シテ一朝ニシテ為シ得ヘキ者ニアラス宜シク先ツ農業保險會社、府縣貯金兼土地抵當貸付會社及、殖民銀行ヲ創設スヘシ而シテ單ニ之ヲ創設スルヲ以テ未

陸軍省農務局擴張セル後ニ於テ始メテ改良ノ實
効ヲ見ル得ニ夫ノ殖民銀行ノ如キハ即チ府
縣貯金兼土地抵當貸付會社ノ複雜セルモノナル
カ故ニ先ツ前ニ府縣貯金兼土地抵當貸付會社ヲ
創設シ多少ノ年月ヲ經タル後更ニ之ヲ設立セザ
ル可ラス

蓋シ小作狀況ノ改良ハ今日ノ急務ニシテ一日モ
之ヲ等閑ニ付ス可ラサルモノ、如シ然リト雖モ
法律上ニ於テ之カ規定ヲ設クルハ事ノ極メテ難
キモノナリ例ヘハ夫ノ條約期限ヲ長クスルハ甚
タ美事ナルカ如シト雖モ亦輕忽ニ命令スヘカラ
サルモノアリ何トナレハ地主及小作人共ニ短期

ノ條約ヲ利トスルコトアレハナリ蓋シ小作人ニ
於テ未タ土地ノ肥瘠耕作ノ難易ヲ知ラスシテ遽
ニ永期ノ條約ヲ結ブキハ為ニ多年ノ重荷ヲ負擔
スルノ不幸ヲ招クトアリ又地主ニ於テモ親シク
小作人ヲ知ラサルトキハ漫リニ耕作ヲナシ其地
味ヲ害センコトヲ恐レ短期又ハ隨意期限ノ小作
條約ヲ締結シ以テ其害ヲ防カント欲スヘシ而
シテ小作人ニ於テモ若シ充分ニ意ヲ耕作ニ用ヒ
サレハ忽チ其小作地ヲ取戻サル、ノ恐アルトキ
ハ常ニ注意シテ耕作ヲ務ムヘシ是レ即チ地主及
小作人共ニ短期ノ條約ヲ利トスル所以ナリ
余以テ今茲ニ小作條約制定ノ困難ト種々ナル利害

得失詳論スル場合ニテサレバ以テ姑ク之ヲ指ツ困雖凡小作人現況ノ改良ハ前ニ陳述シタル勸解事業ニ由リテ多少之ヲ為スルヲ得ヘキナリ

第十一條

余ハ勸解廳及ヒ府縣貯金兼土地抵當貸付會社ヲシテ左ノ定限ヲ以テ小作人及地主ノ間ニ於ケル勸解事務ヲ兼攝セシメント欲スルナリ

第一 府縣貯金兼土地抵當貸付會社ヲシテ地主及ヒ小作人雙方ノ請求ニ因リテ其土地ヲ抵當トシ年賦償還債券ヲ以テ地主ニ賠償シ小作人ヲ土地ノ所有主トナス

第二 勸解廳及ヒ府縣貯金兼土地抵當貸付會社ヲシテ小作人一方ノ請求ニ因リテ勸解ヲナサシムルトキハ地主ノ權利ヲ犯ス者ト謂フヘシ縱ニ年賦償還債券ヲ以テ相當ノ賠償ヲ為スト雖モ元ト地主ノ本意ニ非サルヲ以テ地主ハ宛モ土地買上ノ處分ヲ受ケシモノニ異ナラサルナリ然レトモ鐵道城砦官廳等ヲ建設スルカ如キ公益ニ關スル事業ニ付テハ政府ニ於テ土地買上ヲナスル少ナレトモ夫ノ農民ノ財產保護シ富裕安全ノ地位ヲ維持セシムルカ如ク固ヨリ亦公益ノ最モ重要ナルモノト謂ハ

新大氣獲得又然シテ日本ノ農民ハ維新以來社會

農地變革土地租條例ノ改正トニ因テ大ニ損害ヲ
蒙リ殆ト其休戚ニ關スルノ場合ニ至レリ故ニ
今其哀運ヲ挽回スルハ最國家ノ急務トナサ、
ル可ラス而シテ之ヲ挽回スルノ得策ハ左ノ場
合ニ於テ小作人一方ノ申告ニ因リ年賦償還債
券ヲ以テ從來ノ地主ニ賠償スヘキノ勸解ヲナ
スニ在リ

(一) 小作人曾テ其土地ヲ所有シ地主其債主
タリシトキ

(二) 災害ニ罹リ又收穫歉少若クハ收穫金高
減少ノ年ニ當リ地主ニ於テ其地ノ慣例ニ
及シ小作料ノ輕減ヲナサ、ルトキ

第十二條

余ハ前ニ抵當債主ト抵當負債主トノ間ニ於ケル
勸解事業ヲ建議スルニ當リ獨逸國ノ土地義務解
放事業(即チ獨逸國ニ於テ農民ノ重荷ヲ解除シタ
ルモノ)トハ少シク異ナル所アルヲ論シタリ今茲
ニ建議スル勸解事業ニ於テモ亦然リ唯農民ノ負
擔ヲ輕減シ為メ地主ニ損害ヲ與ヘサルノ一點
ニ至リテハ彼我其趣ヲ異ニセサルナリ
今是ノ主旨ヲ證明センカ為メ撒遜王國ノ土地義
務解放銀行論ヲ引用シ該國農民カ銀行ノ幫助ト
勸解法ト効力トニ由テ免レタル一二ノ義務ヲ列

第一類

領主ノ領民ノ關係ヨリ由來シタル
義務即チ昔時奴隸ノ義務ニ類似セル

(イ)

右ノ外領主相互間ノ義務即チ其各所
有地ニ附從セルモノ

第二類

第一類ニ屬スル者ハ左ノ如シ

(イ)

農民ノ領主ニ對スル賦役但シ自身又ハ牛
馬ヲ以テ領主ノ持地ヲ耕作シ又ハ領主所
有ノ建物等ヲ修復保存スル工事ニ服役ス
ルヲ謂フ(所謂工事賦役是ナリ)

(ロ)

農民ノ移轉ニ係ル制限及ヒ他領ノ借地人
トノ結婚ニ付キ領主ヨリ承諾ヲ受ケルノ

義務

(ハ)

領主ノ隨意ニ土地ヲ買上ケ及其貸地ヲ他
人ニ賣渡スルヲ得ルノ權利

(ニ)

領主ハ領民死亡ノ時其遺産中若干ノ家畜
ノ相續ヲ受クヘキ權利(最良家畜相續權)

(ホ)

領主ノ強制權及專業權即一定ノ事業ニ付
領民ヲ使役スルノ權利及ヒ一定ノ物品ヲ
購求セシムルノ權利(製粉麥酒葡萄酒農具
類強賣權)

(ヘ)

物品又ハ金納ニ係ル種々ノ貢稅即チ一ハ
定期(收穫物ノ十分一又ハ現金)又一ハ所有
權ノ變更若クハ他ノ事故アル毎ニ差出不

第二類 各領相互ニ秣場又ハ木材、藁、樹脂、葦、秣草、
砂、粘土、石材發掘場ヲ使用スルノ權

以上列記スル所ニ由リテ之ヲ觀レハ撒遜國ノ勸
解事業ハ日本國ニ比スレハ其複雜ナルヲ知ルヘ
シ蓋シ該國ノ勸解事業ハ世襲借地及其借地料ニ
關スルモノ、外種々ノ賦役貢稅負擔ノ類ナリト
ス然レ氏彼我同シク目的トスル所ハ農民ヲシテ
障礙ナク自由ニカタテ所有地ニ盡シ以テ其土地ヲ
豐饒ナラシムルニアリ今日日本ノ勸解事業ハ撒遜
國ヨリモ甚々簡單ニシテ行ヒ易キハ殊ニ幸トス
ヘキ所トス抑國家ノ富源タル農業ヲ保護獎勵シ

其收益ヲ增多ナラシムルハ日本モ亦撒遜國ト同
シク此ヲ以テ國家ノ大目的トナスヘキ所ナリ
撒遜國ハ土地義務解放銀行ヲ設立シテ義務者ノ
資産ハ勿論國家ノ財産ヲ要セスシテ能ク負債償
還ノ資金ヲ蒐集スルノ方法ヲ發明シタリ余曾テ
土地抵當論ニ於テ論シテ曰ク凡ノ獨逸國ノ年賦
償還銀行ハ地主ト農民トノ中間ニ立チ地主ニハ
抵當證券ヲ交付シテ隨意ニ之ヲ賣却スルヲ得セ
シメ又農民ニハ此資金ニ對シテ利子及年賦償還
金ヲ出サシメ其義務ノ抵當トシテ從來抵當トナ
シタル土地ヲ以テ更ニ銀行ノ抵當ト為サシム又
銀行ノ地主又ハ抵當證券買得人即チ抵當證券所

有者證券ノ利率ヲ排ヒ其發行シタル抵當證券
 ノ元金ハ農民ヨリ納付スル償還金ノ割合ニ隨ヒ
 漸次ニ之ヲ消却セシム
 抑モ年賦償還銀行ハ政府ノ設立ニ係ルモノ多シ
 是レ其主旨タル自己ノ利益ヲ顧ミス專ラ農民ノ
 利益ヲ保護スルニアルヲ以テナリ夫ノ有名ナル
 經濟學士ロツシエル氏曰ク何レノ邦國ヲ問ハス
 勞スル所少クシテ利益ノ大ナランヲ欲セハ政府
 ニ於テ土地義務解放銀行ヲ設立シ若シクハ其損
 益ノ保證ヲナスニ若クモノナシト
 夫レ年賦償還銀行ノ農業上ニ利益アルハ屢々實見
 スル所ニシテ獨逸國中大小二十個國ノ如キハ續

續該銀行ヲ設立スルニ至レリ
 今撒遜國年賦償還銀行五十年祭ノ祝文ニ據ルニ
 土地義務解放銀行ノ幫助ヲ以テ農民ノ土地ニ係
 ル義務ヲ解放シタル獨逸各國并ニ其規則發布ノ
 年次左ノ如シ

- (一) 撒遜王國 千八百三十二年
- (二) 舊司選侯國ヘツセン 同
- (三) 大公國巴丁 千八百三十三年
- (四) 大公國ブラウンシエワイグ 千八百三十四年
- (五) 大公國ヘツセン 千八百三十六年
- (六) 大公國撒遜亞耳丁堡 千八百三十七年
- (七) 舊大公國ナツアーウ 千八百四十年

(八) 舊王國 ハンノーフェル

千八百四十年

(九) 新王國 チュムベルグ王國

千八百四十年

(十) バイエルン王國

千八百四十八年

(十一) 公國 アンハルト、デッサウ及キョテ

千八百四十八年

(十二) 大公國 撒遜マイニンゲン

千八百四十九年

(十三) 李魯社王國

千八百五十年

(十四) 侯國 シェワルスブルグ、ゾントテルハウゼン

千八百五十年

(十五) 奧地多利帝國

千八百五十年

(十六) 大公國 サキセン、コーフルグ、ゴター

千八百五十年及

(十七) 舊伯爵國 ヘッセン、ホムブルヒ

千八百五十三年

(十八) 大公國 サキセン、ワイエール

千八百五十二年

(十九) 侯國 ロイス、エンゲレ、リー子

千八百五十三年

(二十) 侯國 ワルデック

千八百五十五年

(二十一) 侯國 シェワルツブルグ、ルードル、スタット

千八百五十四年

(二十二) 侯國 ロイス、エルデン、リー子

千八百五十五年

(二十三) 舊王國 ハンノーフェル

千八百五十六年

及千八百七十三年

本ニ設立セントスル銀行ト異ナル所アリト雖其
大體ハ則一ナリ故ニ其功益ノ如何ヲ揭述セハ日
本ニ於テモ亦如何ノ功益ヲ收メ得ヘキヤヲ知ル
ニ足ラン彼ノ撒遜王國年賦償還銀行ノ五十年祭
祝文ニ據レハ左ノ如シ

該國年賦償還銀行ハ義務者ヨリ徵收スヘキ年賦
消還金ノ最下額ヲ二十片即チ二錢トシ而シテ其
金額ノ確定及義務解放ニ關スル百般ノ事務ハ之
ヲ土地ニ係ル義務ノ解放及共有地ヲ分割シテ私
有地トナスノ事業ヲ擔任スル特別委員及中央委

員ニ委任セリ

又該銀行ハ一ニハ少額ノ義務解放資金ニ至ルマ
テ盡ク抵當證券ヲ以テ之ヲ交付スルヲ要シ一ニ
ハ務メテ證券ノ種類ヲ増サ、ランコトヲ要スル
カ為メ之ヲ左ノ等級ニ區別セリ

- 甲號 三千馬克
- 乙號 千五百馬克
- 丙號 三百馬克
- 丁號 百五十馬克
- 戊號 七十五馬克
- 己號 三十七馬克五十片

故ニ券面金額ノ最高額ハ凡ソ日本ノ銀貨七百五

拾圓ニシテ其最下額ハ拾圓トス
又年賦金ノ登記ハ初メ土地購入簿又ハ土地購入
及約定原簿ニ於テセシカ後之ヲ地籍簿及抵當臺
帳ニ登記シ以テ銀行ノ抵當トナセリ是レ抵當法
ノ改正前ニ在リテ已ニ銀行ノ為ニ其抵當ヲ確實
ナラシメタル例證トス
年賦金ノ徵收方及ヒ公賣處分ノ場合ニ於ケル徵
收順序ハ地租ト同一ニシ其徵收方ハ直稅局ヲシ
テ之ヲ擔任セシム
又年賦償還銀行ノ抵當地ニ對スル權利ハ其土地
ノ全部ニ及ヘリ故ニ縱ヒ所有者ニ於テ其一部ヲ
賣却スルモ買受人ハ決シテ銀行ニ對シテ直接ノ

義務ヲ負擔セス又該買受人ニ於テ更ニ其土地ノ
幾分ヲ他人ニ割與スルモ亦然リ故ニ土地ヲ分割
スルモ銀行ハ決シテ之ニ干與スルコトナク是等
ノ事務ハ舉テ之ヲ租稅局ノ主管トセリ
此他銀行ハ年賦金交付ノ許否及ヒ年賦償還債券
ノ交付方ニ付キ其地主ト直接ノ談判ヲ為サス其
貸付金及ヒ年賦償還金ヲ確定シ且ツ地籍及抵當
事務局ヲ經テ其金額ヲ交付スルノ事務ハ舉テ之
ヲ土地義務解放及共有地分割委員ニ委任セリ
年賦償還銀行ノ貸附口數ハ撒遜國ノミニ於テ四
十五萬四千七百十六口ニシテ其金高ハ合計八千
餘圓六十八萬八千四百六十五馬克凡ソ日本ノ銀

百四十拾萬圓(即チ平均一口ノ貸附金額ハ凡
 ヲ日本ノ銀貨四拾七圓トス惟フニ此金額タル日
 本ノ小作人ノ如キ一家僅ニ三段以下ノ田畝ヲ耕
 スモノト雖モ尚ホ少額ナリトスル所ナラシ
 夫レ撒遜國ハ其面積狭小ニシテ人口殆ント日本
 ノ十三分一二過キサルモ土地義務解放事業ノ為
 メニ困弊疾苦ヲ免レタル農民ハ凡ソ五十萬人ノ
 多キニ居レリ又前記ノ獨逸各邦中ニ於テ姑ク他
 ノ諸邦ヲ除キ唯ハンノーフエル及奧國ノ年賦償
 還銀行ヨリ地主ニ交付シタル債券ノ金額ノミヲ
 算スルモ壹億七千萬圓(即チハンノーフエルハ銀
 貨貳千萬圓奧國ハ壹億五千萬圓)ノ巨額ニ上レリ

年賦償還銀行ノ偉功アル亦以テ知ルヘキナリ
 索國ノ賦役義務解放事業ハ千八百十一年始テ之
 ヲ開設シ千八百五十年其方法規則ヲ定メタリ今
 千八百八十一年同八十二年及八十三年索國農業
 ニ係ル農務省ノ奏上年報ニ依リ其統計ヲ左ニ掲
 載シテ以テ該銀行ノ景況ヲ示サン

| 年 | 義務ノ解放 ヲ受ケタル 義務者ノ數 | 元 金 馬克 | 年 賦 金 馬克 | 燕麥納ノ分 ハイシエフエル 但五十リツテハ |
|------|-------------------------|-----------|-------------|-----------------------------|
| 一八七二 | 二二三九八 | 五〇〇五八四八 | 六四三二四 | 四二八四 |
| 一八七三 | 三九〇七四 | 九七八九〇一 | 二二二八一三 | 二三四八 |
| 一八七四 | 六三一〇六 | 二三八〇八一三五 | 五一五七七二 | 一九三〇 |

| | | | | |
|------|-----------|----------|---------|---------|
| 一八七五 | 七七二二一 | 二三七一五九六七 | 四三一〇五八 | 二八六四 |
| 一八七六 | 七五〇九二 | 四五三三三七四 | 一三六二五七〇 | 四三四六 |
| 一八七七 | 七二〇四二 | 三四〇七五六五 | 九六二七〇三 | 八六四四 |
| 一八七八 | 六一五四三 | 二八七六〇三二 | 七〇八七八九 | 三九七八 |
| 一八七九 | 七二一四四 | 三四八八二六九 | 六五五四八五 | 四七〇一 |
| 一八八〇 | 七四一三二 | 二六四六五六〇 | 七二〇七三八 | 三三七一 |
| 一八八一 | 七七八九七 | 二四三〇六三一 | 六九三七七六 | 一四八六 |
| 一八八二 | 九二七五一 | 二七七七〇六〇 | 八三三九〇六 | 九六七 |
| 一八八三 | 九八二七二 | 二五五一六九八 | 七九二六三九 | 八六五 |
| 合計 | 八二六一七二 | 八六九六六〇四七 | 七九六四五七二 | 三九七八四 |
| | 義務者一名ニ付平均 | 一〇五、二馬克 | 九、六馬克 | 二、四リッセル |

此表ニ依レハ亭國ニ於テ十二个年間ニ義務解放

ヲ受ケタル農民ノ數ハ八十二萬六千七百七十二名
 トス而シテ平均一人ノ借受金額ハ貳拾六圓三拾
 錢ニシテ其年賦金ハ金納貳圓四拾錢燕麥納一升
 三合ノ割トス

獨逸國ノ年賦償還銀行ノ細民ヲ救済スルノ功益
 此ノ如ク其レ大ナリ日本ニ於テモ亦宜シク是ト
 同一ナル方策ヲ立テ以テ小民ノ困弊疾苦ヲ救治
 セサル可ラサルナリ

1875-1883
 1875-1883

第三篇 興農銀行

第十三條

曩ニ農業保險論ニ論述シタル各種事業ノ設置構
成ハ農民ヲ救済シテ目下ノ苦境ヲ脱離セシムル
ノ要法ニシテ今本篇ニ記述スル興農銀行ハ農業
ヲ進興擴張スルノ目的ニ出ツルモノナリ夫ノ收
獲保險、家畜保險、家屋保險、驛遍町村貯金預所、農民
貯金組合、府縣貯金兼土地抵當貸付會社ノ如キハ
抵當證券(年賦償還債券)ヲ發行シ勸解廳ト結合シ
テ農民ノ書入質負債ヲ償還シ又小作料ヲ輕減シ
以テ農民ヲシテ高利債主ノ酷遇ヲ免レシメ且ツ
再々高利ノ負債ヲナスノ不幸ニ陷ラサラシメン

其の案ナリ而シテ興農銀行ナルモノハ則チ然ラス農民ニ貸付スルニ期限中督促ヲ為サ、ル長期低利ノ資金ヲ以テシ以テ農業ノ改良進歩ヲ獎勵振興セントスルニアルナリ之ヲ人體ニ譬フルニ病者ヲシテ體操擊劍ノ如キ各般ノ方法ヲ以テ體カヲ養ハシメント欲セハ須ラク先其病根ヲ驅除シテ健康ニ復セシメサルヘカラス今日本ノ農業上ニ於テモ亦然リ進ンテ新事業ヲ起スノ程度ニ至ラシメント欲セハ須ラク先其障碍タル害物ヲ除去セサル可テサルナリ是レ固ヨリ自然ノ理ナリ之ヲ史乘ニ徵スルニ古來農業ヲ獎勵スルカ為メ各種ノ貸付法アリシ邦

國ト雖モ興農銀行ヲ設立スルニ至テ始テ其構成ヲ完全シタリ今之カ實證ヲ舉ケンニ撒遜國ハ千八百三十二年他ノ諸國ニ率先シテ農民ノ義務解放ノ為メ土地義務解放銀行ヲ創設シ千八百六十年ニ至リ土地改良ノ為メ興農銀行ヲ創設シタリ是ヲ興農銀行ノ嚆矢トス之ニ次ク者ハ孛國ニシテ千八百五十年ニ於テ各州土地抵當銀行設立ノ制ヲ定メ土地ノ義務ヲ解除シ且ツ從來ノ權利者義務者間ノ關係ヲ解キ其後千八百七十九年ニ至リ各州組合ニ興農銀行設立ノ權ヲ付與シタリ孰近ニ至リテ此例ヲ襲用シタルモノハ「ヘツセン」大公國及「デンブルク」國ナリ而シテ「ヘツセン」

國ハ千八百三十六年ニ土地義務解放銀行ヲ創設シ千八百八十年ニ至リ興農銀行ヲ設置シタリ又¹タルデンブルグ國ハ千八百八十三年二月十四日ノ法律ヲ以テ土地抵當貸付所ヲ設ケ内務省ノ所屬ト為セリ其目的ハ地方ノ金融ヲ圓滑ニシ及農業ヲ進興スルノ主意ニ出テ通常ノ書入質貸付ノ外排水、除水、灌溉、道路布設、森林改良及瘠地肥培等ノ事業ニ對シ年賦償還法ヲ以テ抵當貸付ヲナセリ又巴華里國ハ千八百四十八年六月四日ノ土地義務解放令ニ據リ土地義務解放金庫ヲ設立シテ解放ノ事業ヲ實施シ嗣テ千八百八十四年ニ至リ官立興農銀行ヲ設立シ左ニ列記スル事業ニ對シ

其資金ヲ貸付セリ

- 一 灌溉及排水事業
- 二 小河及私有河川改良、堤防築造及洪水防禦事業(李國ノ法律ニ依レハ貯水池、通航及通航事業ニモ亦貸付ヲ為スコトヲ得)
- 三 遠隔ノ地ニ散在スル所有地ヲ交換シテ同所ニ集合スル事
- 四 荒地肥培事業并ニ曠野及秣場改良事業
- 五 耕地ヲ利スルノ用ニ供スル道路ヲ開築スル事業

六 町村所屬荒地ヲ森林ト為スノ事業

興農銀行タルモノハ前文ニ記載スルカ如ク

實ニ準備期設ニ係リ農業進興ノ最終方策ニシ
テ多年ノ準備ヲ經テ其構成始メテ完全ヲ得タル
モノナリ故ニ今此ニ其設置構成ヲ論スルハ或ハ
大早計ニ似タリト雖モ該銀行ノ目的タル前文ニ
記載スルカ如クナルヲ以テ其設立ノ今日ニ必要
ナルハ復論ヲ待タス而シテ勸解廳、農業保險會社
及土地抵當貸付會社ノ如キハ皆此事務ノ初程ナ
ルヲ以テ假令ヒ其設置構成ニ方リ數多ノ障碍困
難アルモ前途ニ興農ノ大功アルヲ思ハ、必スヤ
勇進敢為ノ志氣ヲ喪ハサルヘシ是レ此篇ニ於テ
其設置構成ヲ論スル所以ナリ

第十四條

日本ニ於テ興農銀行ヲ設立センニハ(上文ニ記載
シタル興農銀行ノ初程タル諸會社等設立ノ後ニ
於テ)充分ノ信用ヲ置クニ足ルヘキ農藝學者アル
ニアラスンハ之ヲ設立スルコト能ハサルヘシ而
シテ今ヤ日本ニ於テハ未タ獨逸國ニ於ケルカ如
キ高尚ノ學術ニ富メル農藝學者アルヲ見ス假令
ヒ之アルモ僅ニ屈指ニ過キサルヘキナリ然レト
モ實際ニ至リテハ必シモ此等ノ農藝學者ヲ要ス
ルニ非ス日本從來ノ農業上ニ於テ能ク地味ノ肥
瘠ヲ識別シ又能ク排水灌溉ノ法ヲ施シテ其實効
ヲ收ムヘキ土地ヲ調査シ起業者ヲ獎勵シ起工案
並ニ費用豫算ヲ起草シ諸般ノ農業取調上ニ於テ

能ク管轄行政廳ヲ幫助シ起工案ニ付キ起業者ニ
必要ノ説明ヲナシ其組合起業ノ條款ヲ定ムルニ
協力シ并ニ實施及維持方ヲ監督スル等ノ能力ヲ
具有スル人ヲ得ハ直チニ該銀行ヲ設置スルコト
ヲ得ヘシ

若シ夫レ日本ニ於テ果シテ此ノ如キ農藝學者ア
ル時ハ其名忽チ府縣貯金兼土地抵當貸付會社及
ヒ勸解廳ニ聞工勸解ノ際又ハ農業上ノ事ニ付意
見ヲ陳述セシムル等ノ際ニ方リ實地ニ其技能ヲ
試験スルヲ得ヘシ而シテ農藝學者ノ意見ニシテ
果シテ充分ニ信憑スルニ足り且ツ實驗上ニ於テ
信憑シ得ヘキモノナルトキハ始メテ新興事業即

チ工業實施ニ就テモ亦其資金ノ貸付ヲナスコト
ヲ得ヘキナリ何トナレハ未タ實際ニ顯ハレサル
事物ヲ判定スルハ現在ノ事物ヲ判定スルカ如ク
容易ナルモノニ非ス農業上ニ在リテモ亦然リ未
開ノ土地ニ就テ其開墾費用ト收穫トヲ見積リ事
業ノ結果ヲ判定シテ之ニ貸付ヲナスハ其至難ア
ルコト既墾ノ土地ニ貸付ヲ為スノ比ニ非サレハ
ナリ

備考

今巴華里國ニ於ケル農藝學者ノ豫修學科ニ
大關スル一例ヲ舉ケンニ凡ソ該國ノ農藝學者
皆ハ豫修及豫業ノ實業學校又ハ高等實業學校

若クハ中學校ノ卒業證書ヲ得タル後「ミエン
ヘン」府ノ高等工藝學校ニ入り三ヶ年ノ學科
ヲ終ヘサルヘカラス而シテ此工藝學校ノ課
程ニヨレハ三ヶ年ノ學科左ノ如シ
一年 高等數學、普通植物學、農業化學、植物培
養學、地質學、荒地肥培學、排水學及畫線學
二年 工藝器械學并ニ諸力平均學、工藝建築
學、實用幾何學、普通土工及街路築造術、秣場
管理學、地形見取圖學
三年 高等測地學、水工術、道路築造各論、普通
機關學、工事豫算法、巴華里國憲法及行政法
但シ中學校ヲ卒業シタル者ニハ右課程ヲ多

少斟酌スルモノトス
學術試驗ニ及第シタル者ハ先ツ郡農藝士ニ
就キ實業生トナリテ實地ヲ研究シ然ル後助
手ト為リテ其事務ヲ取扱フモノトス

第十五條

土地改良資金ノ貸付ニ必要ナル者ハ唯ニ前文ニ
記載スル農藝學者ノミナラス之ヲ使用スル官署
及會社等モ亦必要ノ機關ナリトス
蓋シ興農銀行ノ土地義務解放銀行ニ於ケルハ相
待テ用テ為スモノニシテ之ヲ兄弟銀行ト稱スル
モ不可セルナキカ如シ撒遜國ノ興農銀行ノ如キ
其義務及中義務解放銀行ニ依頼シ且ツ義務

解任委員ヲシテ兼勤セシメタリ蓋シ興農銀行
行ハ起業資本貸付ノ際其起業者ト直接ノ談判ヲ
為サスシテ土地義務解放中央委員(方今ドレスデ
ン郡廳ニ於テ一課ヲ為ス)ヲシテ其間ニ周旋シ興
農銀行ノ手續ニ從ヒ農業上ニ係ル排水及灌漑ノ
起業案ヲ調査セシム又字國ノ勸解廳ハ其權限稍
狭シト雖モ除水管設置ノ貸付ニ付テハ他ノ既ニ
登記シタル諸般ノ書入質ヲ起エテ先取權ヲ與フ
ルモノトス又「アルデンブルク」國ニ於テハ農業上
ノ起業費貸付方ハ主管官廳ヨリ内務省中ニ設ク
ル土地抵當貸付會社管理局ニ上申シ其許否ニ任
スモノトセリ

第十六條

日本ニ於テ興農銀行ノ設立ニ因リ得ル所ノ利益
果シテ幾何ナルヤヲ推算セント欲スト雖モ往時
ヨリ排水等ノ工事ニ關スル統計表アルヲ見ス故
ニ其町村會ニ於テ從來排水及灌漑ノ起業ヲ實行
シタルモノ幾何ナルヤ之カ為メ設立シタル地主
組合ノ數幾何ナルヤ又其會員ノ數并ニ排水及灌
漑ヲ要スル土地ノ數改良ヲ要スル土地ノ面積并
ニ其起業費ノ多寡ノ如キ並ニ之ヲ知ルニ由ナキ
ナリ但一个年間ニ支出スル道路築造費、港灣改良
費、堤防修繕費等ノ如キハ之ヲ知ルヘキ報告ナキ
ニテ即チ内務省土木局ノ報告ニ依レハ明治

十二年乃至十三年ニ支出シタル金額ハ大凡ソ六百萬圓ナリト云フ(此報告ノ精確ナラサルハ余ノ甚ク遺憾トスル所ナリ)此金額ハ固ヨリ官庫ノ支出ニ係ルモノニシテ民間ノ支出ニアラス而シテ余カ主トシテ知ラント欲スルモノハ農業改良ノタメ民間ヨリ支出シタル金額ニ在リ夫ノ巴華里國ニ於テハ千八百七十年ヲ以テ千八百五十三年乃至七十年ノ土地改良事業ニ係ル統計表ヲ編輯シ巴華里王國統計表附録第二十冊ヲ以テ之ヲ世ニ公ニセリ蓋シ其統計表タル興農銀行創設以前十四年ニ係ルヲ以テ其載スル所ノ土地改良ハ該銀行ノ力ヲ借ラサルコト明カナリ

千八百五十三年乃至七十年ノ巴華里國土地改良事業

| | | |
|---|-------------------|-----------------------|
| 一 | 組合ノ灌溉及排水事業 | 三二一 |
| | 組合員數 | 一三、〇九四 |
| | 其中強制ヲ受ケテ組合ニ加入シタル者 | 六一 |
| | 排水及、灌溉ヲナセシ土地ノ數 | 二七、六四三 |
| | 右面積 | 三、九九三ヘクタール |
| | 其他改良ノ餘潤ヲ受ケタル土地ノ面積 | 但シ一ヘクタールハ日本ノ二丁八步三寸ニ當ル |
| | | 二三、五三一ヘクタール |
| | | 銀貨二〇二九五圓 |

十二年度費用

二 自餘ノ排水及灌溉事業
土地改良ノ面積

費用

三 除水管設置事業

土地面積

費用

四 遠隔ノ地ニ散在スル所
有地ヲ交換シテ同所

ニ集合スルノ事業

土地所有者ノ數

土地ノ數

集合後土地ノ數

三、一五六、ヘクタール

銀貨五七、二五〇圓

一、六九五

七、七八五、ヘクタール

銀貨二七一、一六四圓

八三三

四、五二五

三二〇〇二

一〇、八八〇

此總面積

故ニ今巴華里國ニ於テ千八百五十三年乃至千八百七十年ノ十七个年間ニ前記ノ事業(第四ヲ除ク)ニ要セシ平均資金ヲ算出スレハ則チ左ノ如シ

第一 組合ノ灌溉及排水事業

一回ニ付

六三二

組合員一名ニ付

一五

一、ヘクタールニ付

六、一三

第二 自餘ノ灌溉及排水事業

一、ヘクタールニ付

一八

第三 除水管設置事業一回ニ

付

一六〇

一、二七〇、六ヘクタール

巴丁國ニ於テモ亦千八百七十年ヨリ千八百七十
 七年ニ至ル八十年ニ於テ興農銀行ノカヲ籍テス
 シテ毎年平均六十一ノ土地改良起業ヲ實施シ其
 面積ハ六百六十四ヘクタールニ及ヒ又其費額ハ
 銀貨四萬九千百三拾九圓即チ一ヘクタールニ付
 銀貨七拾四圓トナレリ又土地合筆ノ費用ハ一ヘ
 クタールニ付銀貨凡ソ六圓貳拾五錢トナレリ
 此他索遜國ハ(ラシクドル)氏索遜王國農業論第
 六十七頁ニ據ル(ル)千八百六十二年ニ於テ一ヘクタ
 ールニ付キ消費セル金額平均左ノ如シ

排水起業

銀貨七拾三圓

灌溉起業

銀貨貳百三圓

一起業ニ付消費セル金額 銀貨千〇七拾八圓

然シテ索遜國ノ興農銀行ニ於テ千八百八十三年
 十二月三十一日ニ至ルマテ二十二年間ニ起業
 資金トシテ支出セル金額ハ凡ソ銀貨貳百三拾貳
 萬四千百四拾五圓ニシテ其内譯ハ左ノ如シ

銀貨拾九萬六千零四拾八圓但シ四十八ノ水路
 改良組合貸付金即チ一組合ニ付平均銀貨四
 千零八拾四圓

銀貨百七拾萬六千四百貳拾四圓但シ千百九十
 二ノ農業上排水及灌溉事業ニ付貸付金即チ
 銀貨一事業ニ付千百九拾貳圓

銀貨四拾貳萬千六百七拾三圓但シ七十四ノ地
方排水及引水事業ニ付貸付金即チ一事業ニ
付銀貨五千六百九拾八圓

今此三種ノ統計ニ據ルトキハ自ラ左ニ掲ル二項
ノ事實アルヲ知ルヘシ其一ハ土地改良起業ハ一
二ノ大起業ヲ除クノ外主トシテ許多ノ小起業ニ
係ルコト其二ハ開墾及改良ヲ施セシ土地ノ面積
ハ全國土地ノ面積ニ比スレハ實ニ僅少ノ割合ヲ
占ムルコト是レナリ試ニ上ニ掲クル索遜國ノ土
地改良事業ヲ見ヨ二十二年間興農銀行ノカヲ籍
リテ實施シタル事業中排水事業ニ係ル者ハ從來
已ニ農業上ニ使用シタル土地全面積ノ百分一、三

〇ニシテ灌溉事業ハ原野全面積ノ百分零、五一ト
ナスナリ又巴華里國ニ於テ千八百五十三年ヨリ
千八百七十年ニ至ル十七年間ニ開墾シタル土
地ノ面積ハ七萬九千七十一ヘクタールニシテ全國
田園地ノ全面積ハ三百七萬三千七百七十八ヘクタールトス故ニ開墾地ノ面積ハ即チ田園地ノ百分二、
五七ナリトス蓋シ日本ニ在リテハ徳川政府政柄
ヲ取リシヨリ以來既ニ二百五十年其間巧ニ農業
上ノ改良進歩ヲ抑制シタリシカ今ヤ明治政府ト
ナリ舊規ヲ改メ新制ヲ施シタルヲ以テ人民ノ銳
意シテ農業上ノ伸張改良ヲ圖ルヤ日一日ヨリ甚
シキニ至リ然レモ日本ニ於テモ亦既墾ノ土地

對興農抵當貸付金ハ(就中此貸付金ヲシテ抵當
證券ヲ發行シ長期低利ニシテ期限中督促ヲ受ケ
ス且ツ高利ニ酷迫セラレ、ノ恐レナキモノタラ
シ、ハ)新ニ開墾スヘキ土地ニ對スル貸付金ニ超
過スヘキコト必セリ是ニ由リテ之ヲ觀ルモ抵當
證券ナルモノハ實際ノ需用上實ニ甚ク重要ニシ
テ其今日ノ急務タルヲ知ルニ足レリ

第十七條

興農銀行ノ資金ハ興農債券ヲ發行シテ以テ之ヲ
募集スルノ法トス其方法ニアリ一ハ其債券ヲ直
ニ起業者ニ交付スルノ法ニシテ此場合ニ在リテ
ハ起業者其損益ヲ負擔シテ自ラ之ヲ賣却シ以テ

現金ニ引換フル者トス又一法ハ銀行ニ於テ之ヲ
市場ニ賣却スルノ法ニシテ此場合ニ在リテハ起
業者現金ニテ貸付ヲ受ルモノトス而シテ起業者
ハ其貸付金ニ付キ土地ノ收穫ヲ以テ銀行ニ辨償
スルノ義務ヲ有シ又銀行ハ其起業者ヨリ得ル所
ノ金額ヲ以テ興農債券ノ利子及元金ヲ消却スル
モノトス故ニ興農銀行ハ抵當證券ヲ發行スル抵
當銀行及土地抵當貸付銀行ト異ナルコトナシ

第十八條

今若シ興農貸付金ニ對スル抵當ヲシテ書入質貸
付ト其方法ヲ異ニセシムルモノトセハ則チ抵當
證券ト興農債券トハ必ス之ヲ區別セサル可ラカ

夫新報文ニ掲タル彼此ノ區別ヲ知ルノ要ナカ
ラシムルヲ得ヘシ

第十九條

余ノ茲ニ興農銀行ト稱スルモノハ單ニ其事務ノ
ミヲ執ル所ノ純粹ナル銀行ヲ指スニアラス即チ
府縣立貯金兼土地抵當貸付所ニシテ改良地所ノ
將來増加スヘキ價額并ニ其費用額ノ評定土地改
良貸付金ノ支出ニ係ル監督及ヒ其他ノ改良事業
(堤防排水溜池等)ノ永遠保存ニ關スル監督等ノ如
キ一定種ノ業務ヲ兼メル者ヲ指スナリ
此他興農銀行ニ於テ町村ニ貸付ヲナスノ方法ハ
將ニ次篇ニ於テ之ヲ論セントス

第四篇 府縣貯金兼土地抵當貸付會社及地

方債券ノ事

第二十條

余ハ嘗テ農業保險論第四十二條ニ於テ論シテ曰
ク現今日本金融ノ組織ハ全國ノ金錢ヲ吸集シテ
漸ク首府ニ聚合スルモノナリ地方ノ金錢其乏ヲ
告クルカ為メ物産ノ價格漸ク低落シ貸借ノ途漸
ク塞リ益々納租ノ現金ヲ得ルニ困苦セリト是ヲ
以テ前ニ金錢ヲ其地方ニ存留セシメンカ為メ貯
金預所(郵便町村貯金預所及ヒ農民貯金組合ト連
合シタル府縣貯金兼土地抵當貸付會社)ヲ設クル
ヲ議建テタリシカ今又是禍害ヲ洗除シ地方人

民衆福利ヲ増進センカ爲メ金錢ヲ地方ニ輸入スルノ方案即チ地方財政ノ組織特ニ地方債ノ事ヲ論セントス

惟フニ日本ノ當路者ハ生産力ヲ有シ及ヒ其利ヲ後世ニ及ホスヘキ大事業(堤、港、波、戸、場、堀、割、耐久水道、隧道、風雨ノ影響ヲ被ムラサル道路、橋梁、其他鐵道等ノ如キモノ)ニ於テハ今日ノ如ク專テ現在ノ收入ノミヲ使用(現今ノ人民特ニ農民ハ此ニ由リテ著シキ負擔ヲナス)セスシテ一ニハ永期且ツ年賦ヲ以テ元利ヲ消却スルヲ得ヘキ公債ヲ起シ以テ其消却義務ノ一部ヲ後來ノ人民ニ負擔セシメニハ大市場即首府ノ取引所ニ於テ此公債ヲ募

リ以テ都府ニ吸集シタル金錢ヲ再ヒ地方ニ輸入スルノ方策ヲ運テサ、ル可ラサルナリ而シテ此目的ヲ達スヘキノ方法ハ地方債ノ發行即是ナリ

第二十一條

地方債トハ貸付會社ノ債券ニシテ賦稅權ヲ有スル府、縣、郡區ニ貸付スル資金ヲ徵募スルカ爲メ發行スルモノヲ謂フ而シテ該府、縣、郡區ヲシテ其賦稅權ヲ以テ右貸附金及之ニ對シテ發行シタル債券ノ利子及元金消却ノ抵當トナサシメ其債券ハ無記名ニシテ一定ノ利子ヲ附シ且ツ其元金ハ貸附會社ニ於テ府、縣、郡區ヨリ納付スル償還金ヲ以テ漸次拂戻スルトス故ニ地方債ノ利子及元金

消却方法 抵當證券、收獲抵當證券、殖民公債證書、
興農債券ト異ナルコトナシ是レ余カ此等ノ業務
ヲ掌理スル公許ノ會社ヲシテ地方債發行ノ事務
ヲ兼擔セシメントスル所以ニシテ彼ノ獨逸、佛蘭
西及其他歐洲諸國ノ如キモ亦之ヲ以テ土地抵當
貸付會社ノ業務トナセリ

右府縣郡區公債募集ノ許否ハ專ラ其監督官廳ノ
任トナシ該官廳ニ於テ其公債ヲ以テ起ス所ノ事
業ハ果シテ生産力ヲ有スルヤ并ニ其利益ハ後世
ニ及フヘキモノナルヤヲ查定シ而シテ後之ヲ許
否スルヲ以テ貸附會社ハ其債券ヲ發行スルニハ
單ニ政府ノ認可アルヤ否ヲ認ムルノ事アルノミ

故ニ該會社ニ在リテハ一モ錯雜困難ナル審査ヲ
ナスヲ要セサルナリ

地方債ノ發行及元金償還、利子支拂并ニ府縣郡區
トノ貸借契約ニ關スル方法ノ簡單ナルコト此ノ
如シ故ニ其發行ヲ委任スルハ土地抵當貸附會社
ニ非ルモ苟モ無限責任ヲ帶ビ確實ノ保證ヲナス
トキハ他ノ大銀行ト雖モ亦妨ナカルヘシ夫ノ日
本銀行ノ如キモ地方債發行ノ事務ヲ委託スルニ
足ルヘキ者ト不然レトモ若シ之ヲ日本銀行ニ委
託スルトキハ或ハ左ノ二害ヲ免レサルヘシ即チ
其一ハ之ト競争スルモノナキヲ以テ負債ノ利息
約定スル事自ラ高キニ過ケルノ恐アリ其二ハ

世上一般ノ利子低落スルノ時ニ至リ更ニ引替公債ヲ發シテ地方債ノ利子ヲ減セントスルニ臨ミ銀行ニシテ若シ其引替費用ノ外更ニ自己ノ利益ヲ圖ラスシテ之ヲ負債者(州縣等)ノ所得ニ歸セシムルニ非ルトキハ負債者ハ到底其利益ヲ受クル能サル是ナリ而テ此第二ノ弊害ノ如キハ銀行ノ特許狀中ニ於テ豫メ之ヲ規定セハ則之ヲ絶ツヲ得サルニアラスト雖モ第一ノ弊害ニ至リテハ之ト充分ノ競争ヲナス者アルニ非サレハ到底之ヲ免ル、コト能ハサルヘキナリ

若シ果シテ日本銀行ヲシテ地方債發行ノ事務ヲ擔當セシムルニ至リ府縣貯金兼土地抵當貸附會

社アリテ其競争ノ好敵手タラハ實ニ府縣等ノ好都合ニシテ其發行事務ヨリ生スル百般ノ利益ヲ收ムルコトヲ得ヘキナリ而シテ該銀行此事務ヲ擔當スルトキハ地方債ノ種類ヲ増加セサレンカ為メ前篇ニ述ヘタル抵當證券ト同一ナル方法ニ依ラサル可ラス即チ府縣抵當證券ハ中央銀行ニ於テ中央抵當證券ト交換シテ世間ノ流通ニ付セサルカ如ク地方債モ亦唯中央地方債ノミヲ以テ世間ニ流通スヘキナリ

第二十二條

各府縣ニ於テ工業費ニ要スル金額ハ果シテ幾何

其數ヲ余ハ今千八百八十六年三月二十七日

蓋シ該新聞ハ官報ニ掲ケタル千八百七十六年乃至八十二年ノ各府縣工業費報告ヲ譯載スル所ニシテ其合計及ヒ歩合ハ余ノ算出セル所ナリ

千八百七十六年乃至八十二年各府縣工業費一覽

| 皇 | 瀧 | 淡 | 瀬 | 橋 | 道 | 汐 | 港 | 河 | 計 | 平均 |
|---------|-------|---|---|----------|---------|-----------|-----------|-----------|---------|---------|
| 城 | 塚 | 河 | 瀬 | 梁 | 路 | 除 | | 川 | | |
| 千八百七十六年 | 一五〇五 | | | 二八〇、五五〇 | 三三九、五三二 | 六二九、五五五 | 七八、六六六 | 一五四七、三三九 | 千八百七十六年 | 千八百七十六年 |
| 千八百七十七年 | 二五 | | | 一五六、〇〇〇 | 三三、五七三 | 七七一、五六四 | 一一〇、六八七 | 一六四九、七〇四 | 千八百七十七年 | 千八百七十七年 |
| 千八百七十八年 | 二九六六 | | | 一七九、七三二 | 五、六六二 | 一〇二、〇五二 | 七三、五四三 | 一、〇四七、七一 | 千八百七十八年 | 千八百七十八年 |
| 千八百七十九年 | 二九五 | | | 一七九、九一〇 | 五、三九七 | 一四、五〇二 | 一五、二九五 | 一、九〇五、五三〇 | 千八百七十九年 | 千八百七十九年 |
| 千八百八十年 | 一五〇 | | | 一八四、八五三 | 六、三三〇 | 一六、二六六 | 二〇、〇二五 | 二、九四四、四九九 | 千八百八十年 | 千八百八十年 |
| 千八百八十一年 | 一四三〇 | | | 二一、八四一 | 七、八二五 | 三三、三七八 | 一八、二〇一 | 三、四五六、八二 | 千八百八十一年 | 千八百八十一年 |
| 千八百八十二年 | 八九八 | | | 三、六九〇 | 八、四四六 | 二四、八六六 | 二二、六〇二 | 三、六三三、七六六 | 千八百八十二年 | 千八百八十二年 |
| 合計 | 八、一六九 | | | 一、七九四、二七 | 四〇、五八四 | 九、九八二、七五 | 一〇、二三九、七九 | 一、五九一、七六〇 | 合計 | 合計 |
| 平均 | 一、六六七 | | | 三、七四一、二七 | 五、七九七、九 | 一、四二五、八九六 | 一、四六二、八三 | 二、二八四、五三七 | 平均 | 平均 |

此表ニ據レハ千八百七十六年ヨリ同八十二年ニ至ル七ヶ年間ニ於テ河川、浚河、橋梁、汐除及ヒ港灣ノ工事ニ支出セル金額ハ凡ソ貳千貳百萬圓樋堰溜渠ノ工事ニ支出セルモノハ凡ソ千貳百五十萬圓又道路(鐵道ヲ除ク)工事ニ支出セルモノハ凡ソ壹千萬圓ニシテ之ヲ一年ニ平均スレハ凡ソ六百五十萬圓トナレリ然リト雖モ此金額タル假リニ初年ノ金額ヲ百トスレハ逐次ニ増加シテ一一四一三四、一五三、一八八、二〇一、二三六ノ割合ニ至ルカ故ニ其平均數ヲ以テ決シテ將來ヲトス可ラサルナリ工業費ノ増加スルコト斯ノ如シ世間需要多キ以テ見ルハキノミ而シテ其費額ハ地方

蓋シ該新聞ハ官報ニ掲ケタル千八百七十六年乃至八十二年ノ各府縣工業費報告ヲ譯載スル所ニシテ其合計及ヒ歩合ハ余ノ算出セル所ナリ

千八百七十六年乃至八十二年各府縣工業費一覽

| 河川 | 港 | 汐除 | 道路 | 橋梁 | 濠 | 澁壕 | 皇城 | 量水標 | 外國地 | 雜 | 合計 | 歩合 |
|---------|-----------|---------|----------|-----------|-----------|----|--------|--------|---------|--------|-----------|-------|
| 千八百七十六年 | 一五四七三九 | 四四九三八 | 七八六六六 | 三三九、九三二 | 二八〇、五五〇 | — | 一五〇五 | 二七四八 | 八一、五七四 | 八〇七三 | 三九八、三三九 | 一〇〇 |
| 千八百七十七年 | 一六四九七〇 | 五八一八 | 一二〇、六八七 | 三三九、九三二 | 一五六、〇九〇 | — | 二五 | 五六一 | 三三、二六六 | 五二、二六 | 四五四、三三二 | 一一四 |
| 千八百七十八年 | 一八、〇七二 | 三六〇、二五 | 七三五、四三 | 五〇、〇五二 | 一七九、七三二 | — | 二九、九六六 | 五九、三二 | 四二、三〇六 | 三六、六七 | 五三〇、四八七 | 一三四 |
| 千八百七十九年 | 一九〇、五、〇 | 九三、四八五 | 一五二、二九五 | 一四五、〇八二 | 一七九、一六〇 | — | 二九、九六六 | 五九、三二 | 五二、三二六 | 三七三 | 六二二、三三八 | 一五三 |
| 千八百八十年 | 二九、四、四九 | 四三三、二八 | 二〇四、〇五 | 一六二、二六六 | 一八四、八五三 | — | 一五〇 | 五九、三二 | 三六、八五一 | 四六、五 | 七五〇、八三〇 | 一八八 |
| 千八百八十一年 | 三四、五、六八 | 八六、六七五 | 一八二、二〇一 | 二二五、三七八 | 二二〇、八四一 | — | 一四三〇 | 七四、二七 | 一〇四、五一九 | 五七五 | 八〇三、〇二七 | 二〇一 |
| 千八百八十二年 | 三六、三、七六 | 二五、七三五 | 二二、六〇二 | 二四八、六〇六 | 三二六、九〇六 | — | 八九八 | 七九、四五 | 八二、〇〇二 | — | 九四五、五九六 | 二二六 |
| 合計 | 一五九、九七六 | 五二五、九〇二 | 一〇、三三九、七 | 九、九二、七五 | 一、七九、四、二七 | — | 七、四、五三 | 四一六、〇四 | 四三六、〇四 | 二二、四一六 | 四、五〇、三、九五 | 一、二二六 |
| 平均 | 二二、八四、五三七 | 七五、二九 | 一四六、二八三 | 一四、二五、八九六 | 二四九、四一、二七 | — | 一〇、六五 | 五九、四三 | 六二、二八六 | 三、二〇二 | 六、四三、三、三二 | 一六一 |

至ル七ヶ年間ニ於テ河川、浚河、橋梁、汐除及ヒ港灣ノ工事ニ支出セル金額ハ凡ソ貳千貳百萬圓樋堰溜渠ノ工事ニ支出セルモノハ凡ソ千貳百五十萬圓又道路(鐵道ヲ除ク)工事ニ支出セルモノハ凡ソ壹千萬圓ニシテ之ヲ一年ニ平均スレハ凡ソ六百五十萬圓トナレリ然リト雖モ此金額タル假リニ初年ノ金額ヲ百トスレハ逐次ニ増加シテ一一四、一三四、一五三、一八八、二〇一、二三六ノ割合ニ至ルカ故ニ其平均數ヲ以テ決シテ將來ヲ卜ス可ラサルナリ工業費ノ増加スルコト斯ノ如シ世間需要多キ以テ見ルハキノミ而シテ其費額ハ地方

税ヲ以テ支出スルモノヲ多シトス千八百八十三年乃至八十四年ニ在リテ地方税ノ總額千八百八拾七萬圓ニ上レリ今千八百八十二年ニ於テ工業費九百四拾五萬六千圓ノ巨額ヲ致セルヲ以テ之ヲ例セハ此兩年ノ工業費ハ遙カニ壹千萬圓ヲ超過シタルコト必セリ若シ此ノ如キ工事ニシテ苟モ生産カヲ有シ且永遠ノ利益トナルモノハ各地方ヲシテ其費額ニ充ツルニ經常收入ヲ以テセヌシテ地方債ヲ發行シ之ヲ募集セシムルハ大ニ地方ノ負擔ヲ輕減シ而シテ將來道路築造河川改良ノ義務ヲシテ今日ヨリ重カラシムルモ亦以テ妨ナカルヘシ況ヤ年々數百萬圓ノ金額ヲ都府ヨ

リ吸集シテ以テ地方ノ金融ヲ圓滑ナラシムルノ大益アルニ於テヤ

第二十二條追加

本書第二十二條刷成ノ後余更ニ謂ヘラク日本ノ官報ニ就テ工業費支出金ノ出所ヲ檢セハ或ハ之ヲ發見スルヲ得ヘシト是ニ於テ官報ニ就テ之ヲ檢セシニ果シテ千八百八十六年(明治十九年)三月十五日ノ官報ニ於テ八十二年(明治十五年)ノ支出金出所ヲ掲ケタリ其事甚タ利益アルヲ以テ茲ニ之ヲ追載ス但シ余カ計算ノ官報ニ載スル所ト符合セサル者三アリ是レ合計額ヲ查算スルニ官報ノ誤植ナルヲ明瞭ナルヲ以テ之ヲ改正セルニ因ル

今此支出金ノ割合ヲ算スルニ國庫ヨリスル者七

分八厘地方税ヨリスル者三割九分五厘協議費ヨリスル者四割九分三厘又寄付金ヨリスル者二分ニシテ其殘餘一分五厘ハ雜出(恐ラクハ諸手數料ヨリスル者ナラシ)トナスナリ

故ニ今千八百八十二年ノ工業費中地方税ヨリ支出スル者三百七拾三萬五千貳百六拾貳圓ヲ千八百八十三年乃至八十四年ノ同支出額ニ對照スルトキハ其割合一割九分七厘トナリ又八十二年ノ協議費ヨリ支出セル金額四百六拾五萬九千五百拾八圓ヲ八十三年乃至八十四年ノ同支出金額ニ對照スル所ハ二割六分トナルナリ

蓋シ工業費八年々其額ヲ増加スルヲ以テ八十三

年乃至八十四年ニ至リテハ其金額非常ノ額ニ昇
リシコト知ルヘキナリ

千八百八十二年全國工業費一覽表

| 河川 港除 汐路 道梁 橋堰 澗渠 淡河 漸壕 皇城 量水 外國 居留 雜地 | 合 計 | | | | | 内 | | | | |
|--|----------|----------|---------|----------|------------|-----------|----------|----------|---------|------------|
| | 國庫金 | 地方稅 | 協議費 | 寄附金 | 雜出金 手数料 | 國庫金 | 地方稅 | 協議費 | 寄附金 | 雜出金 手数料 |
| 三六三、七六六 | 三九五、三四五 | 一九六、二五九 | 一二三、四三六 | 六、二九一 | 三五、一八九 | 三六三、七六六 | 三九五、三四五 | 一九六、二五九 | 一二三、四三六 | 六、二九一 |
| 二一五、七三五 | 七六、八七八 | 五四、〇五六 | 七八、二八四 | 一、六二三 | 四、八九五 | 二一五、七三五 | 七六、八七八 | 五四、〇五六 | 七八、二八四 | 一、六二三 |
| 二二、六〇二 | 二九、四九四 | 九二、七九九 | 九〇、一九二 | 一一六 | | 二二、六〇二 | 二九、四九四 | 九二、七九九 | 九〇、一九二 | 一一六 |
| 二、四八、六四六 | 一、二六、五三八 | 一〇、一、八八七 | 九三七、五〇〇 | 一、三二、七八三 | 三八、九三八 | 二、四八、六四六 | 一、二六、五三八 | 一〇、一、八八七 | 九三七、五〇〇 | 一、三二、七八三 |
| 八四六、四一六 | 一七、五五三 | 四五、一七一 | 三四三、五七二 | 三三、九三二 | 六五〇 | 八四六、四一六 | 一七、五五三 | 四五、一七一 | 三四三、五七二 | 三三、九三二 |
| 三、一六九、六六六 | | 一四五、四四二 | 一九七、六二四 | 二四、八八 | 四四、五一 | 三、一六九、六六六 | | 一四五、四四二 | 一九七、六二四 | 二四、八八 |
| 三六、一七〇 | | 一五、七七二 | | | 二〇、三九八 | 三六、一七〇 | | 一五、七七二 | | 二〇、三九八 |
| 二、七〇〇 | 二、七〇〇 | | | | | 二、七〇〇 | 二、七〇〇 | | | |
| 八九八 | 八九八 | | | | | 八九八 | 八九八 | | | |
| 七、九四五 | 七、九四五 | | | | | 七、九四五 | 七、九四五 | | | |
| 八二、〇〇二 | 八二、〇〇二 | | | | | 八二、〇〇二 | 八二、〇〇二 | | | |

| 總計 | 割合 |
|------------|-------|
| 九、四五、九四六 | 一〇〇.〇 |
| 七三九、三三五 | 七.八 |
| 三、七三、五、六二 | 三九.五 |
| 四六五、九、五一八 | 四九.三 |
| 一、七七、二、三三二 | 一.九 |
| 一、四四、五、八一 | 一.五 |

千八百八十二年

